

芥川龍之介「黒衣聖母」論

——メリメ「イールのヴィナス」との比較分析を通じて——

姜 惠 彬

一、はじめに

芥川龍之介の「黒衣聖母」(大正9年5月、『文章俱樂部』)は、早くから堀辰雄により、メリメ「イールのヴィナス」を典拠としたことが指摘されている。⁽¹⁾ 黒い銅像という特異なテーマ、銘名の解釈の二重性などにその類似点が認められ、この典拠関係は現在ほとんど定説化している。⁽²⁾ 作中で「私」は、田代という人物から、稲見家に伝わる「禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母」の「伝説」を聞く。更に、本作は、稲見君からゆずられた麻利耶観音像をテーブルの上におき、田代君が「私」に向って伝承を語る冒頭と最後の場面の間に、田代君の語りがそのまま挿入される入れ子構造を取っている。「黒衣聖母」の伝説は、複数の人物達の証言を経て、体験者である母親の栄から息子の稲見へ、更に観音像を預かった田代から「私」に伝わる。栄の弟である茂作が重病になった時、祖母は黒衣聖母に、自分が生存している間には、茂作の命を助けてほしいと祈ったという。茂作の命は助かったが、祖母はその夜死んでしまう。従来の研究は、「せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし」という祈祷文と、「麻

利耶観音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです」という最後の一文の皮肉をどのように解釈するかをめぐる観点と、前述した入れ子構造から来る語りの問題に焦点を当てる二つの方向に分れてきた。

更に前者は、本作から看取される芥川の宗教観に向けられている。「祖母の死から、「絶対・永遠とか(彼岸的)なものを人間に従属させたと思った(錯覚した)とき、人間が陥る非劇」を指摘する海老井英次氏の論は、その代表的な論考であるといえよう。⁽³⁾ 更に佐藤泰正氏は、「信仰にひそむエゴイズムへの痛烈な問いかけ」を軸に、「殉教」に対する「心理的」関心やキリスト教に対する「シニカルな眼」など、従来指摘されてきた芥川の「切支丹物」における宗教性の「矛盾」を踏まえ、本作から「宗教性」以上の意味を探っている。⁽⁴⁾ 河泰厚氏も「変えられない事実」としてあった「茂作」の死の前に祖母を殺すことで、麻利耶観音の「悪意に満ちた業」として祈りがかなえられたことをもとに、作品から「素朴な(信)の在り方に憧れつつ、逆にその底にしばしばエゴイズムの所在を見逃すことのできぬ芥川の(分裂)の痛み⁽⁵⁾」を読んでいる。

従来の研究においては、野田康文氏が読者行為との関連の中で本作を位置づけているように、作品の語りが焦点化しつつある。氏は、

最初に聖母に向かつて「正式な祈り」で始まった祖母の祈りと聖母の意味が、読者行為の過程でずらされ、最後には「信仰とは無縁の蒐集家のテールの上」に置かれる聖母像に過ぎなくなっている過程に注目した⁶。更に西原千博氏は、「単なる「像」に過ぎなかったものを、読者に神として読ませるようにすること」、つまり「異化」作用を通して、本作に「物語の力」の具現を評価している点で、語り手の「仕掛け」という解釈の可能性を提示した⁷。この中で、語り手の代が替わる毎に解釈が打ち消されるのではなく、語り手たちの解釈が「並置」されているという「恣意性」を問題にしている菅井美里氏の指摘は示唆に富む⁸。

本論では、前述のような語りと構造の問題に着目しながら、今まで前景化されてこなかったメリメの「イールのヴィナス」との比較分析を試みたい。現在まで黒い聖母象という題材的な類似しか認められなかった典拠と本作が、その構図においても強い関連性を持っていることを明らかにし、「黒衣聖母」を試みる複数の人物達の視点の処理とその作品の意図を問い直すことを目指す。

二、メリメ「イールのヴィナス」

プロスベル・メリメ「イールのヴィナス」(La Venus d'Ile 1837)の初邦訳は大正13年6月の『イルの女神像』(岡田実麿・石川剛訳、開文社)で、芥川は英訳で本書を読んでいたと考えられる⁹。

本作は、考古学者の「私」が、現地調査中訪れたペイオラード氏一家に起った、黒いブロンズのヴィーナス像にまつわる殺人事件を

扱っている。ペイオラード氏の娘とアルフォンス君の結婚式の日、アルフォンス君はテニス試合に邪魔になった結婚指輪をヴィナス像の指に差し込んでおく。しかし不思議にもヴィナス像の指が曲がったまま、指輪を取り返せなかったという話を近所の人に知らせた夜、アルフォンス君は巨大なものに襲われ殺害される。事件はヴィーナス像による殺人とされ、「私」はその街を離れる。

本作は、メリメが歴史記念物監視官としての活動中に行った、東部ピレネー地方を背景にした調査旅行の副産物とされてきた¹⁰。動く銅像や、指輪を銅像に与える話は、メリメ自身が中世の伝説から借りてきたことを明らかにしており、自筆原稿にも「一八三四年にイルで発見された古代彫刻と、その変わった碑文について、東ピレネー県評議会委員ペルオラード氏によってなされた解釈についてのメリメ氏の報告」と題されている¹¹。ここで注目したいのは、伝説化されている出来事と、それを伝える「私」の位置、つまり芥川の「黒衣聖母」との類似点であり、メリメの自筆原稿上のタイトルに示された、自作の虚構性における距離感である。奇怪な出来事を如何に本当らしく見せかけるのかを試みるのが、本作の狙いである¹²と見えるのだ。

従来、本作は、フランス革命以後のロマン主義全盛期の¹³830年代に流行した、幻想小説の中に位置づけられるのが一般的である¹⁴。しかし、美術・考現学者であったメリメの職務と作品との関係は、前述したヴィナス像や伝説に関する作者の知識の反映を読みとる根拠にもなっている¹⁵。つまり、本作が単なる怪異を扱う幻想小説に止まらず、メリメの合理主義者としての意識を反映して点で、多様な解

積がなされてきた作品である点に注目する必要がある。マルセル・シュネデル氏は、「科学と理性」への信頼、「唯物論の立場」にあり無神論者であったメリメの態度を「懐疑者の仮面」とし、「イールのヴィーナス」にメリメの「超自然的なもの」への「不安」が反映されていると説く。森茂太郎氏は、メリメの「不信仰」の態度を「不安」による「画面」としたシュネデル氏の論に反論し、「迷信」や「信仰」に対する徹底した懐疑が、メリメの幻想小説を書くための条件であり、この点が他のフランスにおける幻想小説との差異をなしているとしている。篠田知和基氏が本作における「解釈の多様性」を指摘している点も注目すべきであろう。以下、本作の詳細な作品分析を通じて、その伝説化の過程を探った上で、芥川の「黒衣聖母」との比較分析を行いたい。

素人の古代学者のペイオラード氏は、「ヴィーナスの銘に関する覚え書き」を完成させる過程で「私」に出会っている。ペイオラード氏の邸宅の庭で発掘された黒いヴィーナス像を、不吉なものとして恐れる周りの人とは違い、ペイオラード氏は像を信奉し、特異な碑文の解釈に拘る。彼は周りに「私」を「名高い考古学者」と紹介しており、「忘却の中」にある、自分たちの住む小さな町と、後に自らが書く「覚え書き」を、「私」が世に知らせることを期待している。「覚え書き」を書けず彼は死に、ノートは「私」に渡されるが、肝心な「覚え書き」はその中に入っていないかったという。この事実により「私」の語りによる「覚え書き」の内容は、信憑性を欠いたまま読者に提示されることになる。碑文に関する二人の解釈は「古代

研究」の一環で、最初「私」は、学者としてヴィーナス像を観察していたはずだ。しかし、その過程で起った殺人事件を「私」が目撃し、ヴィーナス像にまつわる伝説と、二人の碑文に関する解釈が結びつくことで、殺人事件の不思議さに話の焦点が当てられることになる。「私」は、ヴィーナス像が指輪を握って離さなかったという話を最初は信じないが、結末には、「迷信的な恐怖」を感じたことを「白状」するに至る。「高名の考古学者」である「私」が、「田舎」の町に起きた殺人事件と、それにまつわる「迷信」に飲み込まれる過程を本作の軸に据え、読みを進めたい。後に触れるが、「黒衣聖母」にも登場する、聖母像に刻まれた肝心な碑文の解釈は「イールのヴィーナス」においては次のように登場する。

①碑文「CAVE AMANTEM」に関する「私」の解釈

「意味は二つありますな。『汝を愛する者に気をつけよ。恋人たちに心許すな』と、訳すこともできます。けれども Cave amantem でありっぱなラテン語とは言えるかどうか疑問です。からな。この女性の悪魔的な表情を見ると、むしろ芸術家が鑑賞者に向かつてこの恐ろしい美しさに対して注意せよ、と警告しているものと信じたくありません。ですから、こう訳してみましようかな。『もしこの女が汝を愛したら、気をつけるがよい』ではいかがでしょう」

②碑文「TVREVI」に関するペイオラード氏の解釈

「けれども腕に小さな孔が見えますね。それは何か、たとえば、腕輪か何かをとめておくのに使われたものだと思います

が、それをこのミロという男が罪滅しの奉納品に捧げたのです。ミロは恵まれざる恋人だったのです。ヴィーナスがこの男に対して腹を立てていたのですな。そこでこの男は金の腕輪を捧げて女神の怒りを鎮めたのです。(略)恋をしている男がヴィーナスを夢に見る。そうして女神が自分の像に金の腕輪を捧げよと命じたと思う。」

「私」が試みる「CAVE AMANTEM」の解釈は、ヴィーナス像が愛することになる相手への警告として、アルフォンス君の殺人事件の伏線になつてゐる。また、ペイオラード氏がヴィーナス象をミロの作品とし、女神に腕輪を捧げたとする話は、ダイヤの指輪をヴィーナス像にはめるアルフォンス君の話と結びつく。事件が終つた時点で整理される過程で、ヴィーナス像に私の注意が向けられるのは自然のようにも見える。例えば、アルフォンス君の婚約者であるピュイガリグの形容にも次のように現われている。

マドモアゼル・ド・ピュイガリグは十八であつた。いかにもしなやかな、きゃしゃなからだのつくりは、未来の夫の筋骨たくましい骨張つた姿とは対照をつくつていた。美しいばかりでなく、何となく人をひきつけるところがあつた。(略)けれどそれは、かすかに悪意の色を帯びていないこともなかつたので、我にもあらず、私は主人ヴィーナスを思い出した。私は心中にこうした比較をしているうちに、一体、あの像に認めざるを得なかつたすぐれた美しさは、大部分、その牝虎のような表情に存在するものでななかるうかという疑問を自分自身に発してみた。

「私」がヴィーナス像に縛られているのは、像の「軽蔑、皮肉、残忍」が読まれる「信じられないくらい美しい」表情に惹かれ、アルフォンス婦人から「悪意の色」を帯びたヴィーナスを想像する場面においても示されていた。「私」は徐々に殺人事件の犯人をヴィーナスとする「迷信」に引き込まれることになり、アルフォンス婦人の殺人現場の目撃談は、その裏付けの一つになつてゐる。結婚式の夜、ヴィーナス像が夫を殺害したという彼女の証言は、聴覚によるものであり、他に目撃者はいない。また、町の人たちは「偶像」に対する恐怖を持つており、「ヴィーナスの日」としてペイオラード氏が決めた金曜日の結婚式は、元々タブー視されている点も看過できない。新婦はその日、やむをえず式を挙げており、新婦の緊張は、披露宴での「我が子よ、ローマのヴィーナスとカタローニユのヴィーナス、いずれをとるか、選べかし」というペイオラード氏の言葉を聞く時に「絶頂」に達していた。事件後、「私」は事件を次のように語つてゐる。

アルフォンス君の生きてゐるところを最後に見たという下男の供述を筆者は忘れるところであつた。それはアルフォンス君が妻の部屋へこれからあがつて行こうというその前であつた。その下男を呼んで、心配そうなうすです、私がどこにいるか、知つてゐるか、ときいた、というものである。下男は私の姿はいぞ見かけなかつた、と答えた。するとアルフォンス氏は、ため息を一つ吐いて、一分以上も物を言わずにじつとしていたが、それからこう言つた、というのである。「ふーん、そうか！畜生、あの人もつれて行かれたのだからうー」私はその下男に向かつて、

アルフォンスさんが君に物を言った時はダイヤの指輪をはめていたかどうか、ときいてみた。(略) この男にいろいろとききただしている間に、あのアルフォンス婦人の供述が家中にひろげられた迷信的な恐怖を、私自身も少々感じて来た。

この殺人事件後の容疑者とされたのは、アルフォンス君と結婚式の前にボーム試合に参加したスペイン人である。彼はボームに負けた屈辱感でアルフォンス君を殺害したことを疑われるが、彼にはアリバイがある。作品で直接叙述されることはないが、隠されている容疑者を考えることは容易く、ヴィーナス像の発掘の時、足を折った男が、その男に使喚された人であるはずだ。元のように歩けなくなった男にバイレオラード氏はお金をやって済ませただけでなく、「ヴィーナスに傷を負わされざるものあるや?」と言っている。バイオラード氏のヴィーナス像に対する盲信的な崇拜は、町の人にも知られており、作品の冒頭部分にヴィーナス像に石を投げる若者の「異教徒の時分の銅」が「ジャン・コルの脚を折りやがった」と言う言葉からも確認できる。しかし、「私」により以上の可能性は打ち消され、アルフォンス君の最後の言葉を伝えられた瞬間、「ダイヤの指輪」を握ったヴィーナス像を想像してしまつたという。「私」の現場の説明と推測によって、殺人の犯人はヴィーナス像になる。しかし、理性的に事件を見る時考えられるいくつかの点、つまり、披露宴のバイオラード氏の言葉を切つ掛けに、アルフォンス君が酔つた状態で、ヴィーナス像が指環を握つた幻覚を見、偶然その日、彼に復讐心を持っていた人物によって殺人事件が起こる可能性、また新婚がヴィーナス像に対する恐怖と殺害場面の目撃から

くる衝撃で、理性的な証言ができなかった可能性があることを看過してはならない。「ヴィーナスの銘に関する覚書」は、「私」のノートの中からは発見されていないので、作中に書かれた二人の議論や碑文の解釈には信憑性がなく、「私」はその話を自分が語りた方向に操作している感がある。最後に、像を鑄つぶし鐘にして鳴らしてから、「すでにぶどうが二度も凍つた」という「悪運」を語ることで、ヴィーナス像に対する「迷信」は完成される。

このように、「イールのヴィーナス」は、隠された事件の解釈を暗示し、事件を歪曲していく人物たちの理性や思考を露出させている点で、幻想と伝承が生まれる過程を示しているといえる。このような問題は、芥川龍之介の「黒衣聖母」において、稲見一家の不思議な出来事が、複数の人物によって語り継がれる内、「伝説」化する過程と無関係ではない。

三、芥川「黒衣聖母」

「黒衣聖母」が、複数の人物たちの語りをもとめ、「私」に伝える稲見君の語りによって整理されていることは冒頭で述べた。本節では、お栄から息子へ、更に田代君から「私」へという過程を、最初から整理してみる。まず、お栄が伝える、弟の病気を救うための祖母の祈祷文は次のようなものである。

お栄による話

祖母は何時もと違つて、お栄の泣くにも頓着せず、その麻利

耶観音の御宮の前に座りながら、恭しく額に十字を切つて、何がお栄にわからない御祈祷をあげ始めたさうです。それが凡そ十分あまりも続いてから、祖母は静に孫娘を抱き起こすと、恠がるのを頼りになだめなため、自分の隣に座らせました。さうして今度はお栄にもわかるやうに、この黒檀の麻利耶観音へ、こんな願をかけ始めました。「(略)もし唯今茂作の身に万一の事でもございましたら、稲見の家は明日が日にも世嗣ぎが絶えてしまうのでございます。(略)私もとる年でございませうし、靈魂を天主に御捧げ申すのも、長い事ではございませうまい。しかし、それまでには孫のお栄も、不慮の災難でもございませぬんだら、大方年頃になるでございませう。何卒私が目をつぶりますまででよろしくございませうから、死の天使の御剣が茂作の体に触れませぬやう、御慈悲を御垂れ下さいませ。」

祖母はお栄を「無理に」連れていき、麻利耶観音への祈りを聞かせており、最初は「お栄にもわからない」言葉だった祈祷文が、「今度はお栄にもわかる」ような言葉に変わる。祖母が二つの祈祷を分けていたとも読めるが、お栄がそのいずれかを無意識に選択して覚えていることも考えられる。のちの祈祷の内容は、幼いお栄に強い印象を残しており、この場面で問題になっているのは、祖母の視点よりも、祈りを聞くお栄の心理であるように見える。茂作が死ぬことで「世嗣ぎが絶えてしま」うという祖母の言葉には、すでに幼いお栄は跡継ぎから疎外されているともいえよう。お栄がまだ「婿をとるほどの年」ではないが、「不慮の災難でもございませぬんだら、大方年頃になる」だろうという言葉の中には、世嗣ぎの目的以上の

お栄の意味はなく、お栄は恐怖の中で初めて家における自分の位置を自覚すると見られる。

①祖母は切髪の頭を下げて、熱心にこう祈りました。するとその言葉が終つた時、恐る恐る顔を擡げたお栄の眼には、気のせいか麻利耶観音が微笑したやうに見えたと言ふのです。

②さて明るる日になつて見ると、成程祖母の願がかなつたか、茂作は昨日よりも熱が下つて、今まではまるで夢中だつたのが、次第に正気さへつて来ました。この容子を見た祖母の喜びは、仲々口には尽せません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑ひながら、涙をこぼしていた顔が、未に忘れられないとか云つていさうです。

祖母の望みは、茂作の世嗣ぎをすることを見ながら自分が生存することであつたが、結局二人は死に、その後、お栄は祖母の言葉通り「婿」を取り、息子を産むことで世嗣ぎをすることができたとみることが出来る。この結果から考えた時、祖母が生きていた間には弟が死ななかつたという皮肉な「伝説」の結末には、祖母に対するお栄の憎しみが投影されているように思える。弟の病氣と世嗣ぎだけが問題になつているなら、お栄の世嗣ぎに関する叙述は必要なかつたはずであり、お栄がそれを詳しく覚えて息子に聞かせる時、その中には、祖母の望みとは反対に、自分一人が生き残つたという、祖母への復讐に近い感情がある。お栄は弟が一瞬生き返つたことを自ら喜んだのではなく、「祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔」「祖母の喜び」だけを語っている。祖母の祈りが終わった時、「気のせいか麻利耶観音が微笑したやうに見えた」という言葉には、祖

母の利巧的な望みが、皮肉な形で叶ったとする、お栄の心理が反映されており、お栄の解釈によって二人の死は伝説の形で作られるのだ。

稲見による話

次に、前述の話を見れば、稲見はどのように伝えているのかを見ていく。

この麻利耶観音は、私の手にはひる以前、新潟県のある町の稲見と云ふ素封家にあつたのです。(略) その稲見の当主と云ふのは、丁度私と同期の法学士で、これが会社にも関係すれば、銀行にも手を出してゐると云ふ、まあ仲々の事業家なのです。そんな関係上、私も一二度稲見の為に、或便宜を計つてやつた事がありました。その礼心だつたのでせう。稲見は或年上京した序に、この家重代の麻利耶観音を私にくれて行つたのです。私の所謂妙な伝説と云ふのも、その時稲見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論さう云ふ不思議を信じてゐる訳でも何でもありません。ただ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂はれ因縁をざつと説明しただけだつたのです。

稲見は田代君に、「母親から聞かされた通り」話を伝えたとしており、「さう云ふ不思議を信じている訳でもなんでも」ないと断つてゐる。しかし、母の話を信じていないとするなら、聖母像にまつる「伝説」を他人に聞かせる理由はない。尚、稲見は「法学士」で、「仲々の事業家」であると同時に、稲見家という「素封家」の相続人でもあり、二人の死は、自らの位置にとつて有利な出来事であつたと判断されたのではないだろうか。稲見とお栄は暗黙の内に「伝

説」の出来事を事実として受け入れ、稲見は「家重代」の物を「礼心」に渡したのではなく、不吉な伝説がまつわる聖母像を田代君へ処分したとみることが出来る。尚、話がお栄から稲見へ、それから田代君へと伝わる時、その「伝説」の内容はどこまでが「母親から聞かされた通り」の話なのかはすでに不分明である。

田代君による話

「どうです。あなたにはこの伝説が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」私はためらつた。(略)「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。ただ、それが稲見家の聖母のせゐだつたかどうかは、疑問ですが、さう云へば、まだあなたはこの麻利耶観音の台座の銘をお読みにならなかつたのでせう。御覧なさい。此処に刻んである横文字を。— DESINE FATA DEUM LECTI SPERARE PRECANDO (汝の祈祷、神々の定め給う所を動かすべしと望む勿れ)の意) ……」

祖母と茂作の死は、お栄と稲見によって「伝説」化され、田代君に伝わる。田代君がそれを「ほんたうにあつたかとも思ふ」のは、麻利耶観音の銘の解釈によつたもので、田代君は、「蒐集家」であるためラテン語の銘を解釈することができた。神々が定める運命を変えることができないという普通の銘が、田代君の中で稲見家の伝説と結びつき、「これは禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云う事です」という解釈と共に、「実際さう云ふ事実が、持ち主にあつた」という解釈になる。

「私」による話

「処が實際さう云ふ事実が、持ち主にあつたと云ふのです。」
 「ほんたうですか。」(略) 田代君は私より、一二年前に大学を卒業した、秀才の聞えの高い法学士である。且又私の知つてゐる限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いてゐない、教養に富んだ新思想家である。その田代君がこんな事を云ひ出す以上、まさかその妙な伝説と云ふのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。――「ほんたうですか。」私は再びかう念を押すと、田代君は燐寸の火を徐にパイプへ移しながら、「さあ、それはあなた自身の御判断に任せるより外はありませんまい。」

田代君が「教養に富んだ新思想家」であり、「伝説」が「荒唐無稽な怪談」でないことを断つておく。「私」の言葉と、その解釈を「あなた自身の御判断に任せる」という田代君の言葉は、話の客観性を語るためであるが、すでに複数の人物によつて語り継がれる話によつて「伝説」は完成されており、「私」にその信憑性を判断する余地はない。「私」が「ほんたうですか」と「念を押す」時から、伝説は「ほんたう」に起きた出来事として伝わっている。

①私は黙つて腕を組んだ儘、暫くはこの黒衣聖母の美しい顔を眺めてゐた。が、眺めてゐる内に、何か怪しい表情が、象牙の顔の何処だかに、漂つてゐるやうな心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顔全体が、ある悪意を帯びた嘲笑を漲らしてゐるやうな気さへしたのである。

②私はこの運命それ自身のやうな麻利耶観音へ、思はず無気味な眼を移した。聖母は黒檀の衣を纏つたまま、やはりその美し

い象牙の顔に、或悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛へてゐる。

「私」は伝説を聞く前から、聖母像の「悪意を帯びた嘲笑」を見ており、それが伝説の麻利耶観音の悪意と結びつく。私が伝説の信憑性を「判断」することはなく、田代君の話が終わつた時点では、聖母像への感想が「永久に冷然と湛へている」表情に変わり、「運命それ自身」として書かれることで稲見家の伝説が結ばれる。

四、おわりに

「黒衣聖母」が多数の先行論において、祖母の死と麻利耶観音への祈りという軸によつて読まれる時、その背後には、稲見家の「伝説」を事象化する判断が前提とされている。しかし、二人の死と聖母とは関係がなく、登場人物たちはそれぞれの欲望や判断によつて「伝説」を作り出し、受け止めているにすぎない。伝承と伝説化において働く語りの作為を露出している点は、メリメの「イールのヴィーナス」と無関係ではない。ヴィーナス像による殺人事件という非現実的な出来事が信憑性を増していく過程で、もつとも疑わしくなるのは、事件の客観性を裏付けようとする「私」の視点であつたように、「黒衣聖母」は、「伝説」が伝わる過程で歪曲されていく「私」の視点を目を向け、語りの客観性を問うつていといえよう。

注

(一) 堀辰雄は、「芥川龍之介論―芸術家としての彼を論ず―」(昭和4

年3月、東京帝国大学文学部国文学科卒業論文)において、この他にも、芥川の「恋愛小説」とメリメの「神父オオバン」、芥川の「湘南の扇」とメリメの「コロンバ」の影響関係を述べている。

(2) 吉田精一氏は「芥川龍之介」(昭和17年2月、三省堂)において、「悪意を帯びた嘲笑をた、へて」人に禍を与える聖母観音は、イールのヴィナスと共通する」としている。須田千里氏は、「芥川龍之介」「切支丹物」の材源「るしへる」「じゆりあゝ・吉助」「おぎん」「黒衣聖母」「奉教人の死」(『国語国文』平成13年9月)において、「日本に於ける公教会の復活」(大正4年1月、天主堂)中の「第十八章 九州各地方に於ける昔の切支丹」「三 バスチアンの伝説」をもう一つの典拠としている。本書は、本作のエピグラフの出典ともされている。

(3) 海老井英次「黒衣聖母」(『三好行雄編『芥川竜之介必携』昭和46年3月、学灯社)

(4) 佐藤泰正「芥川と切支丹物―その主題と文体―」(『国文学』昭和52年5月)

(5) 河泰厚「芥川龍之介の基督教思想」(平成10年5月、翰林書房)

(6) 野田康文「芥川龍之介「黒衣聖母」の創作方法―少女Vとしてのお祭の視点―」(『比較思想研究』平成16年12月)

(7) 西原千博「黒衣聖母」(『芥川龍之介新辞典』平成15年12月、翰林書房)

(8) 菅井美里「伝承とその分岐―芥川龍之介「黒衣聖母」―」(『日本文学』平成18年5月)

(9) 1837年5月 [La Revue des Deux Mondes] (『両世界評論』Magen & Comon) に発表。1841年5月 [La Venus d'Ile] 単行本発行。

初英訳は、1887 [The Venus of Ile] (Tales Before Supper] Myndart Verelst, New York Brentanos) である。

(10) 杉捷夫・矢野常有訳「ヴィーナスの殺人」の「訳者序」参照。

(11) 1850年前後の書翰に、「フレハーの伝える中世の伝説」や「ルカーノス」から素材を借りており、「ルカーノス」には、「フィロプセウデーの中で人を殴る彫像」の伝説があるという。また、「指輪を大理石かブロンズのヴィーナスの像に与えた青年の話」は「ボンタヌス」から借りたというが、「フレハー」と、「ボンタヌス」の典拠は見つかっていない。これらの典拠関係については「メリメ全集」(昭和52年3月、河出書房新社)や松原秀一氏の「イールのヴィーナス」と「教父伝」(慶応義塾大学芸文学会「芸文研究」平成3年4月)を主に参照した。

(12) 田村毅「フランス文学史」(田村毅・塩川徹也編、平成7年11月、東京大学出版会)

(13) このような観点は、杉本圭子氏の「古代の逆襲―メリメ「イールのヴィーナス」試論」(明治学院大学言語文化研究所「言語文化」平成11年3月)の論考が代表的である。

(14) マルセル・シュネデル「フランス幻想文学史」(渡辺明夫・篠田知和基訳、昭和52年8月、国書刊行会)

(15) 森茂太郎「大いなるかな、エペソスのアルテミス(1) リメ「イールのヴィーナス」をめぐる」(九州大学フランス語フランス文学研究会 [Scelia] 平成13年9月)

(16) 篠田知和基「フランス幻想文学展望」(静岡大学教養部研究報告・人文科学篇) 昭和54年10月)

〔付記〕芥川龍之介の「黒衣聖母」本文は初出に拠り、漢字は新字体に改めた。引用文中の傍線は引用者に拠る。メリメの「イールのヴィーナス」本文は、芥川が参照したのが英訳である仮定の下、昭和52年3月初版の『メリメ全集』（石川剛訳、河出書房新社）に拠った。